

平成23年10月31日
(2011年)

平成22年度吹田市立博物館事業評価報告書

吹田市立博物館協議会
委員長 藪田 貫

吹田市立博物館の平成22年度事業評価について吹田市立博物館協議会では平成23年6月15日および平成23年10月26日の協議会において慎重に審議した。その結果について吹田市立博物館がめざす9つの活動目標に沿って報告する。

1 展示 総合評価 4.0点

常設展示は展示替えに積極的に取り組み、リニューアルの計画を進めていく必要がある。特別展示は多様な展示を実施し、なかでも市民参画と新たな利用者層の創出をはかる画期的な取り組みであると評価できる。

常設展示については館蔵資料を用いた展示替えをさらに積極的に取り組んでいただきたい。リニューアルについては中期計画事項とはいえ、検討中ではなく、年ごとの何らかの成果を出していただきたい。多くの特別展、企画展において出陳された資料は借用資料が多いだろうが、常設展示に利用できるものはすみやかに活用すべきである。アンケートの結果をしっかりと集約し、構想の検討につなげていただきたい。そのためにはテーマを位置づけていくことが必要であり、計画案に基づき市民へもっとPRして意見を募ることも有効かと思われる。しかし、リニューアルすれば問題がすべて解決するというわけではなく、情報発信をめざして教育プログラムを整備することで既存の展示がよみがえる余地は大いに残されているように思う。市民ニーズを反映させるだけでなく、専門性をもった学芸員の構想力のほうが重要である。それを市政に反映させる努力を博物館としては優先することが大切ではなかろうか。展示方法、展示解説の工夫、展示に関する多様な企画が重要になってくると考える。

展示解説については多くの機会をとらえて解説を実施している点は評価できる。既存の展示を再発見し、さらに理解を深めるためにも展示解説の効果を見直すことも必要である。今後も対面式の案内が増えていくことを期待する。

特別展においては中期(5年)の展示計画を立案していることは評価したい。今後も市民のニーズを把握しながら企画を進めていただきたい。また、1年間に多様な多くの展示を企画実施した点を評価したい。春季特別展「古代摂津国考」、秋季特別展「災害から地域遺産をみなおす」「千里の道は世界に通ずー梅棹忠夫写真展」は地域にこだわった地域博物館ならではの内容であったと考える。特に夏季特別展「吹田の自然と環境ーヒメボタルのいるまちー」を中心として市民参画による展示はたいへん評価でき、全国的にも注目されてしかるべき取り組みと考える。また、学校教育連携展示である特別企画「むかしのくらしと学校」もボランティアの参加を得て毎年内容が充実していることが感じ取れ、「地

域に開かれた博物館」「何度も足を運びたくなる博物館」につながる取り組みといえる。さらに市民参画展示のシステムや条件整備などを検討し、長期的展望にたった今後の発展が望まれる。

実験展示「さわる五感の挑戦Ⅴ」は触覚を磨き、博物館資料から新たな情報を引き出すとともに、これまで博物館利用がむずかしかった利用者層にも幅を広げ、子どもにも好評であった注目すべき展示である。この展示期間には常設展示にもさわるコーナーなどを設けていくことも充実の一つと考える。今後とも一層、内容が充実することを期待したい。実験展示「大学生が考える博物館展示ーモノが魅せる過去ー」は発想は評価できるが、観覧者数につながらなかった点が残念である。継続実施する場合は再考すべき点も多い。

特別展については「一般の市民参加」と「マイノリティーへの対応」という二つの点で画期的な取り組みをしていると、セールスポイントをもっと強調する必要があるだろう。

展示の記録化については記録を残すことは大切であるが、その目的、活用を明確化することが必要である。市民活動の記録を、今後博物館として保存・活用の道を考えるべきであろう。

出前展示については業務の多い中であって博物館の存在を広く示すこともでき、評価できる。出前授業とリンクさせて実施すればさらなる展開が期待できる。

アンケート調査は観覧者の満足度をはかるためには一定の効果が期待できるが、その結果を将来の展示にどのように反映させるかが重要である。その点で、途中評価が重要と考える。

西村公朝資料の展示活用と展示室の拡張計画については財政事情は厳しいと考えるが、粘り強く検討していってもらいたい。

2 市民参画 総合評価 4.2点

市民との協働・連携事業に関しては、特別展等において多くの市民の参画が得られ、協議会委員として館の運営への参画も果たされている。また、博物館活動の記録化にも市民が原動力となり画期的な活動が展開されていると評価できる。

市民キュレーター制度は再検討を要する。梅棹忠夫の理論によると、教育はチャージ（充電）、文化はディスチャージ（放電）である。子ども・若年層はチャージ、市民参画はディスチャージと心得て取り組むことが課題ではなかろうか。その点で、市民はキュレーターになるために学習をする必要はないからである。市民にはむしろ博物館を利用して知的に楽しむ回路を提供することのほうが意味があると考ええる。市民キュレーター制度、博物館トーク、講座の講師への参画は博物館の知的利用の一環として位置づけすることが博物館の活性化をもたらす。

市民ニーズの把握についてのアンケート調査は活用目的をはっきりさせることが必要である。また、市民による「評価」やテーマを決めて「提案」を求める姿勢が必要である。要するに「市民から学ぶ姿勢」が大切であり、そのうえで展示、教育普及計画を検討していくべきである。今後は市民参画のシステムを検討していくとともに、市民相互のコミュニケーションが円滑になされるような活動が必要となる。

ボランティア活動については特別企画での活動は展示の企画や運営のレベルからの参入となっており、質の高い活動となっている。喫茶コーナーも経年の継続的な活動によって

なくてはならない存在にまで達している。今後も多様なボランティア組織を育成し、ボランティアのスキルを向上させるような環境を保つためにも養成のための研修や反省会などを実施し、資質向上を果たして博物館を支える多様な人材を積極的に組織していただきたい。

3 地域学習の拠点 総合評価 4.0点

地域学習の拠点づくりへの取り組みも高い水準にあると思われる。教育普及事業は多種多様な数多くの事業を実施し、さらに数多くの出前講座・依頼講座にも講師を派遣している点は評価できる。さらにアンケートの結果をふまえ、活動方針にたった中長期の事業計画を明確に出す必要がある。

ゴールデンウィークや夏季展示において子ども向けイベントを積極的に実施した点は利用者層の幅を広げ、若年層への学習提供という点では評価できるが、大人の市民には博物館を楽しんでもらうことが大切である。生涯学習という言い方もあるが、大人にとって博物館は知的に楽しむ施設である。

展示・イベント情報だけでなく、吹田などに関するさまざまな情報について来館しなくとも知ることができる博物館固有のサービス源の開発が必要ではなかろうか。博物館は市民にとって大切な文化的情報のメディアの1つであることを指摘したい。情報拠点としての機能を強化していくことで、レファレンス、特別利用もさらなる増加が見込めるものとする。博物館にいけば問題が解決するような解説機能の強化もはかつてほしい。

地域の連携については、ますます地域の文化の情報拠点であるコアの役割を担い、他の博物館、文化施設とも広く連携をはかることを期待する。

北大阪ミュージアムネットワークの活動がやや停滞しているようである。北大阪という広域において多くの他館と連携をはかるネットワーク組織は全国的にも数少ないものであり、是非軌道に乗せていってもらいたい。

4 情報発信 総合評価 4.0点

ホームページの運用は改善工夫がなされ、アクセス数ともに評価できる。さらなる情報発信をめざして資料データベースの公開と各種メディアへの広報、情報発信を強化する必要がある。

蔵書データベースや年度当初に年間展示計画を公開するなど情報の更新も適切になされている。蔵書データベースの公開はたとえ利用率が低くとも本質的なサービスと考える。今後は先進博物館の例を参考にするなどして、資料のデータベースの公開に向け準備を進め、さらなるホームページの充実を期待する。

博物館だよりは執筆者の幅が広がり、市民が執筆する機会も増え、さまざまな事業の紹介もなされ、開かれた広報誌として機能している。今後も内容の充実を図りつつ刊行を続けていってもらいたい。年6回刊行を検討してもいいのではないか。

このように情報発信の努力は評価できるし、成果も悪くはない。ただし、さらなる展開は十分可能である。肝心なことは、発信すべき内容があり、情報メディアを大切に扱うことである。品質のいい製品が必ずしも売れるわけではなく、市場を開拓しなければ販

売は向上しない。来館者を市場（お客さま）と考える発想の転換が必要かもしれない。ドラッカー流に言えば、博物館（企業）の目的は来館者（顧客）の創造である。来館者収入（利潤）の追求ではない。顧客の創造のために広報（マーケティング）が不可欠である理由もここにある。マスメディアはもちろん、さまざまなメディアへの情報提供の促進、情報提供の方法を考え、新規利用者の開拓を考えるなど積極的な広報のために時間とエネルギーと知恵をもっと割く覚悟がほしい。なお、博物館活動はホームページ、館報、たよりなどに公開されているが、評価については予告などを合わせて展望を公開していかなければ関心も持たれないと思う。

5 学校教育との連携と支援 総合評価 3.6点

小学校3年生社会科向けの展示「むかしのくらしと学校」展は子どもから興味を引かれる充実した内容であり、学芸員、ボランティア、教員の連携がうまくとれている好例である。今後は教員との博物館利用に関する研究会を立ち上げ、学習プログラムの検討を進める必要がある。

「むかしのくらしと学校」展に関する出前授業は非常によい内容だと思う。学校の教員への研修にも参加が望まれ、館外にも積極的に事業を展開している点で評価したい。今後も学習指導要領の改訂などにも対応しつつ継続して開催するとともに6年生や中学校などへ対象を拡大していってもらいたい。

学校から博物館へのアクセスの問題は今後もバス利用などについて検討していってもらいたい。中学校の博物館利用については授業として見学の時間を取ることがむずかしい。博物館に近い中学校を対象に利用法を考えていくことがよいと考える。生徒の利用を促進するにはまず教員にもっと博物館を意識してもらうことが必要であり、そのために教員と博物館職員の交流を深めていくべきである。中学校の職場体験については参加した生徒たちは内容に満足しているが、博物館のイベント業務を体験できればさらによいのではないか。

今後は小学校6年生などの高学年や中・高校生を対象にした取り組みを計画しなければならないが、そのためには常設展示の整備充実（リニューアル）が不可欠である。小中高教員との博物館利用に関する研究会を立ち上げ、各成長レベルに応じた教員手引き・教材開発・学習プログラム等の検討を進めていき、博物館の利用に関する研修を実施することも利用の促進には有効と考える。特に6年生には歴史の各時代についての地元資料を利用した読み物などの教材作成、資料の貸出を周知していくことで博物館の展示の利用を広めていくことなどが有効ではないか。博物館前のピンク火山灰層などは地層全体がみれるように整備すれば6年生の理科の教材として活用が進むのではないか。

また、学校への特別展などのチラシは全生徒に配布できるようにしなければ効果は期待できない。最低でも各クラスに掲示できるようにクラス数の準備が必要となる。

バックヤードツアーはかつて宮城県美術館が行っていた「美術（博物）館探検」を参考にしているかどうか。

学校教育はチャージであるが、もっと積極的に取り組んでもよい。その点、吹田高校との間で「高博連携」に関する締結がなされたことには注目し、期待している。連携は「地域社会研究」科目において、地域歴史に関する授業と実地研修を博物館が受け持ち、高校

側はクラブ活動などの発表の場として博物館を利用するほか、展覧会でのイベントへ協力する。こうした博物館と学校との相互活用の協議の場を持つことによって、高校生の博物館利用の形態や方法を検討し、博物館常設展示を利用した授業や自由研究などにとどまらず、新たな学校教育と博物館との多様な活用法を醸成し、従来利用の少なかった高校生の利用を促進できる可能性がある。連携を全国的なモデルに仕立てることを考え、その成果をすみやかに公表してほしい。

6 資料の収集と保管 総合評価 3.4点

資料の収集については古写真、フィルム収集、地域性を示すコレクション形成のため博覧会資料などを積極的収集している点は評価できるが、歴史資料に片寄りがあり、バランスに欠く。他分野も積極的な収集を進めていく必要がある。

収集された資料は適切な環境で保存され、広く公開されていくことが必要である。そのためにも収蔵スペースの確保は重要な課題であり、西村公朝資料の収蔵のためにも収蔵庫の拡幅を是非実現してほしい。なお、『西村公朝作品・資料目録（西村家蔵）』の刊行は資料活用のための成果物として評価できる。

資料の登録整理は適切になされているが、資料の活用のための第一歩であり、今後も怠りなく進めていただきたい。資料のデータのデジタル化に着手したことは一定の評価ができるが、現代の情報社会にとっては急務の課題であり、その進捗は「博情報館」のメルクマールといっても過言ではない。歴史、考古、美術の進捗度が低く課題を残している。

資料の管理と収蔵庫の環境維持管理は適切になされ、アイオガードの代替剤（エキヒューム）への移行もスムーズに進んでいる。今後は環境法に基づくくん蒸について研究を進めていただきたい。

7 調査研究 総合評価 3.4点

調査研究ならびにその成果の公表は一定水準に達している。成果の公表を積極的になし、学芸員の専門性をアピールして各種共同研究を実施していく必要がある。

市民団体によるヒメボタルに関する長年の調査はその成果が吹田市指定天然記念物への指定につながり、夏季特別展への公開につながっている。今後も調査成果を活動計画に反映させることが必要である。

発信拠点としての評価に資する情報提供がなされていない。歴史講座、トーク等の口頭発表や館報・たよりなどの刊行物以外にもデジタル通信メディアや動画での成果の公表も必要ではなかろうか。

学芸員は最近では博物館の機能を使って市民参画、地域連携事業を実施するプロデューサー、コーディネーターとしての役割も果たしている。専門性を持った学芸員を確保するために専門性をアピールする方法も考えておくことが必要となつてこよう。

共同研究については、国立民族学博物館と関西大学とで実施されている。関西大学との共同研究は学校と博物館との連携学習の教材となる教員用副読本を制作し、その内容は現在の吹田市域が確定する前の行政単位であった1町5村を単位に「吹田の文化遺産」についてまとめたものとなっている。今後もさらに市民との共同調査や吹田高校との「高博共

同」で博物館利用の教育活動について共同研究会を立ち上げてほしい。

8 施設の整備・維持管理 総合評価 3.4点

施設の維持管理に関しては定期的な点検がなされている。施設の改修および設備の更新やアクセス表示を順次進め、ビジターセンターの建設に努力する必要がある。

施設の維持・管理については展示機器や収蔵庫の空調機器の点検は博物館活動を支えるものであり、今後も継続して実施していただきたい。また、開館20年近くが経過し、設備の更新や施設の改修などの必要があるものは事業に支障が生じないように計画的に対応していてもらいたい。

博物館へのアクセスについては現在も博物館の場所やルートがわかりにくいという意見が多い。博物館にいたるルートに看板のような表示が必要と考える。できれば無味乾燥な文字情報やピクトだけでなく、展示品の写真などが添えられるとよい。また、名神高速道路を車で走る人が見えるような位置に目立つ看板がほしい。同乗者の視野に入れば、その効果は少なくないはずである。

名神高速道路吹田サービスエリアからのアクセス道路については実現を望む声も多く、今後とも引き続き協議していつていただきたい。また、博物館に目を向けさせ、気軽に立ち寄れるアピールポイントがほしい。キャラクターづくりや花で飾るなど集客につながる活動もある程度必要ではないか。

ビジターセンターの建設は財政事情もあろうが、市民が博物館活動を行う際の作業スペースとしての利用も計画されており、博物館の機能を補完するものでもあり活性化につながる。市長部局としても取り組んでももらいたい課題である。今後も継続して実現に努力していつてもらいたい。

9 社会貢献 総合評価 4.0点

学芸員養成課程における博物館実習生および学芸員インターンシップや発展途上国の博物館職員への研修事業であるJICA研修の受け入れは、未来の学芸員に対する人材育成や国際貢献といった点で評価できる。さらに積極的な展開とPRを実施していくべきである。

今後も継続して実施してもらいたい、インターンシップのプログラムを整理し、博物館実習の展示実習の公開など成果面を広報によって広く知らしめることが課題である。

講師派遣に関しては大学へ非常勤講師を派遣するなど積極的な活動も見受けられるが、どちらかという受身の姿勢であるので、今後は講師派遣について対応できる講座名などの一覧をPRするなど積極的な側面を強調することが肝要である。

学会、研究会等への支援については評価できる。今後ますます取り組んでいつてもらいたい。

総評

吹田市立博物館の使命・目標・中長期計画・点検・評価を平成22年（2011年）5月26日に答申し、平成23年度は事業点検、評価を実施する初年度となった。点検、評価のスタイル自体に今後検討していく余地があると考えられるが、吹田市立博物館の平成22年度の事業運営に関しては退職などにより学芸員の人数が半減する年度であったなかで、多彩な特別展を実施した他、イベントなど教育普及事業でも多くの成果を生み出した。特に「さわる五感の挑戦」展は全国的に注視度が高く、市民参画展示の実施など「一般の市民参加」と「マイノリティーへの対応」という二つの点で吹田市立博物館は画期的な取り組みをしている点が吹田市立博物館の最大の特徴である。中期計画のなかで今後も継続的に検討の必要がある事業や一層の工夫と改善の努力が必要な事業も見受けられるが、全体的には評価できる。

今後、広報を強化し自己点検に積極的に取り組み、アンケートなどによる利用者の意見を把握して事業の活動改善につなげていてもらいたい。

博物館のあり方が問われてきている現在の社会的状況のなか、博物館の使命、目標を再認識して市民に開かれ、地域の諸団体と連携を深め、博物館活動を積極的に展開していかれることを期待したい。また、これだけの多くの事業を限られた学芸員の員数から円滑に遂行できるのかが危惧もされる。選択と集中に基づき事業計画の再考も必要ではないだろうか。

＊なお、活動目標ごとになされた総合評価の点数は学識経験者6名、学校教育関係者2名、社会教育関係者3名、市民公募委員2名からなる計13名の博物館協議会委員による5点満点の個別評価の平均点とした。